

論文

物語論における人称の意味

認知的談話構築の観点から

山本雅子

要旨

本稿では、認知言語学の談話構造構築の観点から人称の意味機能を考察し、物語論における人称による語り機能を明らかにした。従来の物語論では、一人称の語りは語り世界の内側にいる語り手によって展開され、三人称の語りは語り世界の外側にいる語り手によって展開されるといわれている。しかしながら、何故一人称では内側であり、三人称では外側となるのかという根拠は説明されていない。本稿では、両者の差異を話し手の立脚するグラウンドとの関わりから考察し、事態解釈の観点から説明した。

キーワード：語りの機能，一人称・三人称，グラウンディング，主客体的解釈

1. はじめに：認知言語学と談話構造構築

認知言語学のアプローチでは、言語現象が、言語主体の環境との相互作用と身体的な経験に動機づけられているという経験基盤主義の言語観を背景としている（山梨 2009:273）。このアプローチでは、「言語」構造は、言語使用に関わる要因とは切り離すことができず、言語使用イベント内で生じる処理活動の中に存在すると考えられる（Langacker 2008:606）。言語使用イベントとは、実際の談話文脈における実際の発話のことであり、参加者のあらゆる意識のレベル、すなわち身体的、心的、社会的、文化的、情緒的、評価

的レベルのなかで生じるものである (Langacker ibid.: 280)。

話し手が実際の、あるいは想像上の対話者に何らかの影響をもたらす、一連のインタラクティブな言語使用イベントが談話である。インタラクティブな言語行為というと、われわれはすぐに話し手と聞き手が向かい合っているような会話を思い浮かべるだろう。たしかに、会話とは、インタラクション (inter-action) という言葉の成り立ちから分かるように、対話者間のアクションである。しかし、インタラクティブな言語行為には、会話のみならず、スピーチのように1人の語り手が多くの聞き手をかかえて、ずっと話し手の役割を維持するという状況もある。また、何かを書く時は、通常読み手を念頭において、会話のパートナーにするように読者の反応を想像しながら、書く行為を行っているとも言える。このように考えると、「語り」も《作者》と《読者》の間の、そして《語り手》と《語りの受け手》の間の《コミュニケーション》あるいは《談話》の過程全体のうちの1つの相 (Wales 1983) といえよう。

談話が談話として成立するためには、一般に、各々の言語表現がお互いに関連づけられることによって理解がなされなければならない。事実、先行の談話文脈に基づいていたり、先行の談話文脈に反応したり、あるいはまたトピックを切り替えたりするなど、各々の言語表現が先行の談話文脈となんらかのかたちで関係を持ち、そして後続の談話文脈への土台を構築していかなければならない。言語表現が持つ意味合いの重要な側面の1つは、それが先行の談話文脈や後続の談話文脈とどう関係づけられるかという点である (Langacker ibid.: 610)。

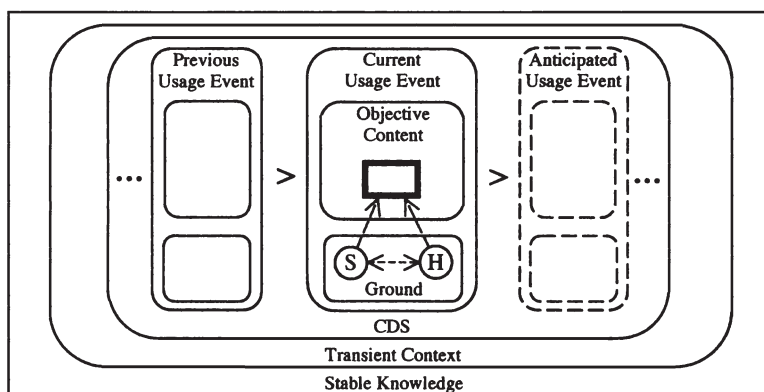


図1 (Langacker 2009: 466)

Langacker (2009) では、進行中の談話の流れを表示する方法として、談話の構築に関わる概念を表す現行談話スペース (current discourse space: CDS) を提唱している。図1に

示す。言語使用イベント (Current Usage Event) は言語表現が備える文脈から理解されることのすべてを取り込んでおり、その一部が言語的意味として位置づけられるのである。その意味において、重要な1つの側面は、話し手(S)と聞き手(H)のインタラクション、つまり、各々が、相手の知っていること、意図していること、そして現在注目していることを判断しようとする事、である。このことは、図1で示されるように、対話者の双方が大まかに似たような客体的概念内容 (Objective Content) に到達し、その中の同じ要素に注目する事に繋がっていく。ここで特に重要なのが、全体の文脈によってもたらされる、話し手と聞き手双方の共通グラウンド (Ground) である。言語解釈のために必要となるこの共通グラウンドが、一般に現行談話スペース (CDS) と呼ばれる。そして、このスペース内に、発話がなされる瞬間においてコミュニケーションの土台としての話し手と聞き手によって共有されると仮定される、すべての内容が取り込まれることになる。もちろん、その一部には、先行談話 (Previous Usage Event) と後続談話 (Anticipated Usage Event) の言語使用イベントをそれぞれ含んで、現在行われている談話そのものがその中間に位置づけられる。さらには、話し手と聞き手の両者によって自明の事柄や、言語理解のために喚起されてくる知識なども、現行談話スペースの一部として取り込まれている。一般に、これらのすべてが関与することで、言語表現の文脈理解が行われ、またその言語的意味が構成されてくるのである (Langacker ibid: 466)。

このような認知言語学の観点から構築された談話構造の概念から見ると、従来の物語論で扱われているさまざまな分野はどのように見えてくるのだろうか。本稿では、そういった分野のうち、語りの機能を明示する人称の意味を考える。

2 グラウンディング

2.1 基本グラウンディング

ある言語表現の現実の意味は、グラウンドと関連づけ、特定して叙述されることによって発現する。この関連づけをグラウンディングという。言語表現が表す意味を動機づける基本スキーマとして提示されるのが図2である。基本的には、グラウンド(G)は発話の文脈における話し手(S)と聞き手(H)の相互作用からなる。意味とは概念化のことであり、それには概念化の主体である話し手と聞き手がともなっていることから、あらゆる言語表現の意味に、少なくともグラウンド最小限度は現れる。破線の楕円が、最小限のグラウンドが存在していることを示している。破線の矢印は注意の方向を表し、その方向には異なる2つの経路 (channel) がある。第一の経路では、発話における相互作用を構成するものと

して、対話者どうしが互いに注意しあう。第二の経路では、対話者たちが、オンステージに焦点化された事物、すなわち言語表現によるプロフィールに注意を向ける。言語表現におけるプロフィールは、モノでもあり得るし、関係でもあり得る (Langacker ibid : 261)。

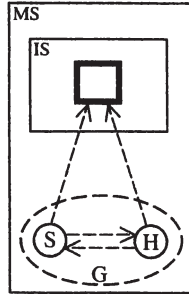


図 2

(Langacker 2008 : 261)

2.2 グラウンディングと主体性

グラウンディングとは、概念化の主体 (subject) と客体 (object) 間の非対称性、すなわち概念化者 (conceptualizer) と概念化されたもの (conceptualized) との間に存在する非対称性を反映している。主体および客体の役割とは、図 3 に概略的に表されるように、概念化により生じる関係の 2 つの様相である。

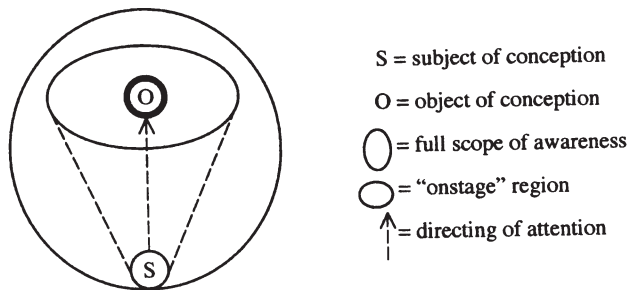


図 3

(Langacker 2008 : 260)

主体(S)は概念化活動に携わり、概念的経験の中心に位置している。しかしながら、主体としての役割においては、主体それ自身が知覚されることはない。主体としての活動の本質の様相は、注意の方向づけ (directing of attention) である。意識化が可能となるスコープ全域 (full scope of awareness) で、主体はある領域—比喩的に述べるならば「オンステー

ジ」領域 (“on stage” region) —に意識を向け、そして注意の焦点として、オンステージ要素を選出する。最大限に限定的に述べるならば、選出されたオンステージ要素が概念化の客体(O)である。認知状況が分極化した結果、主体は主体的 (subjectively) に解釈され、客体は客体的 (objectively) に解釈されることになる。もっぱら自己意識のない主体としてのみ機能する場合、主体は最大限に主体的に解釈されており、単に客体の感知という認知活動に完全に同化した、発現しない概念化者として存在していることになる。このことを逆に述べるならば、客体が明瞭に認められ、観察者と客体を取り巻く環境の両方から明確に区分されるとき、客体は最大限に客体的に解釈されていることになる。

たとえば、次の文を見てみよう。

(a) There is a clearing ahead of me.

(b) There is a clearing ahead.

(池上 2000:274)

いずれの文も、森の中で、話者の前方に（木の伐採された）空き地があるという状況を叙述しているわけであるが、(a)では、話者はあたかも自分をも含んだ写真のなかの状況を見ているかのように、言わばその状況の外に立って客体的に捉えて報告しているという印象を与える。一方、(b)は、森を通過している話者が行く手前方に空き地があるのを認識して報告しているといった印象がするであろう。話者は、状況を対象化して客体化して捉えているのではなくて、自らの意識という場に投影された様相として主体的に捉えているわけである。つまり、(a)(b)を比較した場合、(a)は(b)に比べるとより客体的な解釈を反映し、(b)は(a)に比べるとより主体的な解釈を反映しているといえる (池上 ibid:274)。

3 グラウンディングと語り手

3.1 語りの機能

〈かたる〉という言語行為を他のそれに類する言語行為から区別し、特徴づけるために、一連の日本語の用法を比較考察してみると、おなじく一つの言語行為を意味するとはいえ、〈いう〉とか〈口にする〉とかいった行為と対比してみた場合、〈かたる〉も〈はなす〉もひとしく、たんなる片言隻言を口にするにとどまらず、通常一つ以上の文にわたる起承転結をもったひとまとまりの発話行為を意味する点で共通のレベルの差といったものがみとめられる (坂部 1990)。つまり、発話内容が構造を備えているか否によって、四者は〈かたる〉〈はなす〉と〈いう〉〈口にする〉に二分されるのである。

構造を備えるという点で共通する〈かたる〉〈はなす〉のあいだの相違について、野家 (1996) は、「話す」が話し手と聞き手の役割が実際に交換可能な「双方向的」な言語行為

であるのに対し、「語る」は語り手と聴き手の役割がある程度固定的な「単方向的」な言語行為と言えそうである。視点を変えれば、「話す」がその都度の場面に拘束された「状況依存的」で「出来事的」な言語行為であるのに比べ、「語る」の方ははるかに、「状況独立的」であり、「構造的」な言語行為だと言うことができる」と説明している。

この「単方向的」「状況独立的」「構造的」という要素を備えた「語る」行為の一つに小説がある。小説とは、多様な〈他者のことば〉の集積を、〈始め〉と〈終わり〉、筋・要約可能な題材構成（物語内容）、要約不可能な表現過程（物語言説）、そしてその語り口（語り）といった、一定の構成的布置の中におくことによって形成される限定されたテキストである（小森 1988:16）。そして、〈作品〉としての言説を、読者に向けて発信しているかのように立ちあらわれてくる虚構の言表主体、テキストの前面にあらわれ、小説の構造を成す地の文を統一するのが「語り手」である（小森 1988）。

しかし、この「語り手」という用語は、人格的イメージを喚起しやすく、誤解を招きやすい。正確を期していえば、語り手とは、虚構の言表装置としての地の文を統一する〈表現主体〉の機能を意味するものであり、〈表現主体〉は、ある作品を〈始め〉から〈終り〉に向かって展開させ構成していくうえで、意図的に選ばれた言葉の装置、あるいは言葉の戦略（小森 *ibid*:17）といえる。語りの機能についてハンブルガー・K (1986) は次のように詳説している。

われわれが認識できるのは、叙事的フィクション、すなわち語られたことは語りの対象ではない、ということである。語られたことの虚構性、つまりその非—現実性は、それが語られる行為から独立的に存在するのではなく、ただそれを語ることによってのみ存在する、すなわち語りの産物であることを意味している。語りとは、こうもいえよう、一つの機能であり、これによって語られたことが生産される、つまり語りの機能である。

物語作者はこの機能を、例えば画家が絵筆を扱うがごとく支配するのである。すなわち物語作者は言表主体ではない、彼は人物や事物について物語るのではなく、人物や事物を語るのである。作中諸人物が語られた人物であるのは、絵画の人物像が描かれた人物像であるのと語る同じである。語られたことと語る行為の間には相互関係すなわち言表関係は成立せず、機能的関連が成立する。これが叙事的フィクションの論理的構造であり、言表の論理的構造とは範疇的に異なっている。

(ハンブルガー・K *ibid*: 106-107)

こうした語りの機能を担った、いわゆる「語り手」の類型は実に多様である（Friedman 1910, Booth 1961, Genette 1972, Chatman 1978, Stanzel 1979, Lanser 1981, Prince 1982 等々）。この多様性にありながら、多くの類型のなかで共通して言及されているのが人称による語

り機能の分類であり、小説には、三人称の語りと一人称の語りがあるとされる。しかしながら、多くが言及する人称でありながら、一人称といわゆる三人称の間には根本的な相違があるかどうか、つまり換言すれば、構造的なものに根ざした相違があるかどうかという問題に対して、物語理論は今日に至るまで、誰もが納得するような答えをまだ出していない（シュタンツェル 1989:66）。次節ではこれら二つの人称の意味機能を談話構築の認知的観点から考察する。

3.2 一人称

3.2.1 一人称の認知的意味

グラウンドの参与者であり概念化者としての「わたし」、「あなた」と、言語化されてテキスト上に表出した「わたし」、「あなた」とのあいだには解釈上の異なりがある。言語化された「わたし」、「あなた」の場合は、概念化によってグラウンドのある相が焦点化された客体がオンステージに留められたとして解釈され、そのプロファイルされた事物は、そのような事物に可能な最大限の客体性を伴って解釈される。しかしながら客体性に寄与する1つの要因は、グラウンドから距離を置くことであるため、この場合は十分に客体的ではないという解釈になる。グラウンドおよびオンステージという二重の役割を果たすことから、プロファイルされた話し手および聞き手は、グラウンドから完全に乖離したもののよう客体的に捉えられるわけではなく、またもっぱら概念化の主体としてのみ機能している場合のように主体的に捉えられるわけでもない（Langacker 2008:334）。したがって、言語化された「わたし」「あなた」が反映する解釈態度は、概念化の主体でもあり、また客体でもある話し手、聞き手の二重の役割を明示的に示すことができる利点があるといえよう。しかしながら、その反面、オンステージの話し手が主体としての役割を同時に持つことになるこの捉え方には、曖昧さがいくぶん伴うことにもなる。

また、「わたし」が判断主体もしくは経験主体となった場合には「わたし」が言語化されない場合がある。図4(a)(b)を見てみよう。

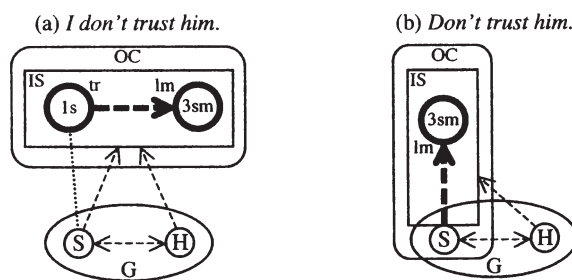


図4

(Langacker 2009:468)

(a)では主語にフォーカスを当てることで主語を明示的に述べ、自分自身が概念対象としてオンステージに置かれていることを示している。これは、まるで他の人から見られているかのように、「わたし」をグラウンドの外に位置づけるかたちで記述したものであるといえる。一方、(b)では記述された状況を示す客体的概念内容では、動詞によってプロファイルされたプロセスのトラジェクターが自分自身を取り込んで概念化されている。しかし、言語レベルでは、自分自身はただ単に概念化者として提示され、オンステージに位置づけられるのを避けて、むしろ自分自身を提示させないかたちで概念化されている。

通常、(b)のような役割は、本来顕在的な文法上の主語を省略することによって言語化される。このため、言語表現の客体的概念内容(OC)と直接スコープ(IS)との間には食い違いが生じてくる。記述された状況を示す客体概念内容では、動詞によってプロファイルされるプロセスのトラジェクターが、自分自身を取り込んで概念化されているのだが、一方、言語レベルでは、自分自身はただ単に概念化者として提示され、オンステージに位置づけられるのを避けて、むしろ自分自身を提示させないかたちで概念化されている。一般に、このような表現の場合、聞き手に対して話し手自身の視点からその概念内容を解釈するように求めるかたちになる。(Langacker 2009:468)

3.2.2 一人称の語り

語り手の種類は無数にあるが、物語の内側にいるか、外側にいるかという観点から、大まかに二種類に分けることができる。内側にいる語り手とは、登場人物の一人である。主人公であれ、傍観者であれ、その語り手は物語世界のなかに生きる住人で、自分のことを「私」と呼ぶ。このような「私」が語る物語を一人称の語りと呼ぶ(廣野 2011:5)。そして、一人称の語り手の特性は、ひとりの限られた視点から眺めることによって生じる主観性にある(廣野 ibid:8)。この主観性が創出されるメカニズムが図4(a)(b)から説明される。

- 【01】①朝、目が覚めると雪が降っていた。②それを私は外を見ずにベッドのなかで知った。③雪の降る日は部屋のなかの空気が白く膨らんで感じる。④降る音はないが、まわりが雪にとざされているのがわかった。⑤その冷えた空気のなかで、私は今日が元旦であることを思い出した。
- ⑥昨日から今日にかけて年が改まった。⑦今日から新しい年が始まる。⑧今年も昭和五十何年なのか、それはすぐ思い出せたが、千九七〇…のあとはスムーズに出てこなかった。⑨私はそのことに少し拘泥したが、すぐそれはあまり意味がないことに気が付いた。
- ⑩そのまましばらく床のなかにいたが、新聞がきているのを思い出して起き上がった。⑪雪の降る日は比較的温かいが、それでもネルのパジャマだけでは震えがきた。⑫小走りにドアの前まで行き、郵便受けから新聞を抜き出した。⑬毎年のことだが元旦の新聞は厚くて抜き出すのに苦労する。⑭それを持ちベッドに戻りかけて、ベランダのカーテンの端

から窓を覗くと思ったとおりで外は雪が降っていた。⑮眼下の屋根はもちろん、その上に突き出しているテレビアンテナにも丸く雪が積り、彼方の防雪林が白いかたまりのように見えた。
(『神々の夕映え』:7)

【01】は小説の冒頭の文章である。② ⑤ ⑨は図4(a)の構図を反映している。グラウンドに位置する語り手である「私」は「私」を言語化することによって、自分の行為をグラウンドの外の出来事、すなわち、客体的に解釈されるオンステージの出来事として他人事のように紹介し、作品世界の事実として提示している。この客体的解釈に対し、① ③ ④ ⑥ ⑦ ⑧ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮はすべて図4(b)の構図を反映する。例えば、③では「私」が世界内の状況を刺激として受容する経験者となり、「部屋のなかの空気が膨らんで」「感じる」。動詞の本来のトラジェクターである「私」がオフステージに引き下げられて主体的に解釈されることで、ランドマーク（「部屋の中の空気が膨らむ」事態）が唯一の焦点対象となり、このランドマークがトラジェクターとしての役目を担う結果になるのである。

このようなランドマークからトラジェクターへの転換は、「私」の言語化を伴わない① ④ ⑥ ⑦ ⑧ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑮のすべての文の構図において成立している。③「感じる」、④「わかった」、⑧否定形、⑬「苦勞する」、⑮「見えた」のように、あからさまに主観性を表現する動詞の場合には、概念化者を取り込んで、対象事態をランドマークからトラジェクターへと転換して概念化する構図は明瞭だろう。しかしながら、③ ④ ⑧ ⑬ ⑮以外の、一見、単に事実を述べているような文であっても、こういった転換を誘発する見えない概念化者があるのであり、何らかの指標がその存在を刻印している。⑪「震えがきた」の「きた」や、⑫「抜き出した」の「出した」のように、その動作が動作主体に向けて発動している場合にも、そこに経験者としての概念化者の存在を想定することは容易である。また、⑥ ⑦「今日」のように主体の時間的位置の明示、さらに、①「目が覚めると」、⑩「思い出して」、⑭「思った通り」のような主観性を顕示する表現との共起も概念化者の存在を要求するものである。これらは「私」が言語化されている文とは異なり、言語レベルでは自分自身はただ単に概念化者として提示されるため、対象事態が極めて主体的に解釈されている。このようにして、一人称の語りの主観性は確保されるのである。

また、一人称の語りでは、客体的に解釈された「私」と、主体的に解釈された「私」が入り混じって表出する。言語化されるか否かの違いはありながら、「私」が存在することは同一であり、そこでは「私」が繰り返し現れているわけであり、この繰り返しがテキストに結束性をもたらす。「結束性」とは、単にテキストの有する一つの特徴というようなものではなく、それはむしろ、テキスト使用者の間での認知的過程を通して生じるもの（ボウランド 1984:9）であり、典型的には形式や意味内容の重複をとおして、物事を結びつけることを意味する概念（Langacker 2009:491）である。語り手はこの結束性によって、テク

ストを安定させるとともに、登場人物の「私」と概念化者の「私」との融合を図ることにより、「私」に関わる事態をより主観性を強めて描出していくのである。そして、このような構図を反映する表現は、話し手自身の視座からその概念内容を解釈するよう聞き手を誘導する (Langacker ibid:469) ものであるため、「私」に出会うやいなや、読み手は経験する心を意識する (ブース・W 1991:198) ようになるのである。

3.3 三人称

3.3.1 三人称の認知的意味

三人称の意味はグラウンディングとの関係から図5で示される。グラウンディングの基本的関係が図2で示されることを先に述べたが、実際の言語使用では、グラウンドとの関係が図2のような最小限の発現にとどまることはない。ほとんどすべての言語表現はその意味に、概念化主体としての役割を果たす話し手と聞き手の存在を喚起するだけでなく、グラウンドの様相をも喚起するというさらなる関係がオンステージの状況との間に定められていることを反映している。このことが図5では実線で示されている。

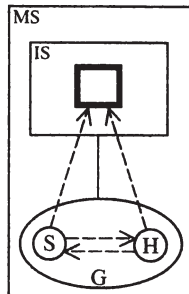


図5

(Langacker 2009:261)

そもそも、「私／あなた／彼女 (彼)」といった人称は、互いの関係の中でしか意味を持たないし、しかもその関係は私たちが常にすでにその内にある呼応的關係である。「私」は「あなた」や「彼女 (彼)」との呼応關係でしか「私」はありえず、「あなた」は「私」や「彼女 (彼)」との呼応關係でしか「あなた」でありえず、「彼女 (彼)」は「私」や「あなた」との呼応關係の中でしか「彼女 (彼)」でありえない (藤谷 2001:23)。しかし、呼応關係にありながら、三者は均等の關係にあるわけではない。

「わたし」と「あなた」についていえば、わたしがわたし [という語] を用いるのは、わたしがだれかに話しかけるときだけであり、そのだれかはわたしの話しかけのなかであなたとなる。両者は相互性のものであり、わたしは相手の話しかけのなかではあなたとなり、

相手は、みずからをわたしで示すことを暗に含んでいるからである（バンヴェニスト 1983:244）。

このようなグラウンドを構成する「あなた」と「わたし」の相互関係を基盤人して「三人称」は存在する。「三人称」とは、話（discourse）の現存のなかで、その現存自体に関係するのではなく、その現存の外にあるだれか、あるいはなにか—このだれか、あるいはなにかはいつでも、一つの客観的な指向を備えていることが可能である—の過程に述辞としてはたらくのにとつての唯一の可能な言表行為様式なのである。《三人称》は、実際には人称の相関関係の無標の成員を表すものであり、代名詞という形の上の類のなかで、《三人称》といわれるものは、その機能と性質から、わたしとあなたとは完全に異なったものなのである（バンヴェニスト ibid:239）。

したがって、三人称における図5の実線は次のような意味を持つといえる。グラウンドに位置する一人称、二人称に対し、指示される対象が焦点化された客体としてオンステージに留められることにある。そして、そのプロファイルされた客体はグラウンドから距離を置くことで、グラウンドにある観察者から明確に区別され、客体として明瞭に認められることから、最大限に客体的に解釈されるのである。

3.3.2 三人称の語り

三人称の語りは、「三人称について」の語りであり、文芸批評において《全知の語り手（omniscient narrator）》と呼ばれる語り手によって展開する。全知の語り手とは、通常は、語られている物語について「あらゆることを知る」特権や、全ての《登場人物》の思考に入り込む特権を持った《含意された作者》と同義である（Wales 2000）。これらの特権をグラウンディングの観点から考える。

【02】①この問答の最中に、鳥飼重太郎は、そつとその場をはずした。②彼は、古帽子をつかむと、音のせぬように部屋を出て行った。

③彼は表へ出ると、市内電車に乗った。④ぼんやり向かい側の車窓から見える動く景色を見ていた。⑤しばらく乗ってある停留所まで来ると、そこで降りた。⑥ひどく年寄りじみた動作であつた。

⑦彼は横丁をいくつもまがった。⑧歩き方はやはり緩慢であつた。⑨それからゆっくりと丹波屋という看板のかかった建物を見あげると、磨きのかかった廊下の見とおせる玄関にはいった。（『点と線』:36）

【02】は「鳥飼重太郎」の一連の行動の描出である。①「鳥飼重太郎は」②「彼は」③「彼は」⑦「彼は」というように、①②③⑦は言語化された三人称を動作主体とする

行為が、語り手の位置するグラウンドから距離をおいたところにある客体事態として客体的に解釈されている。なかでも、なんの修飾表現も付されず、動作のみが淡々と描写された③⑦は最大限に客体的に解釈された事態といえよう。それに対し、①②は「そっと」「音のせぬように」という「鳥飼重太郎」でなければ知り得ない気配りを表す主観的な副詞表現が付されている。これら副詞表現のプロファイルは、視座を「鳥飼」にシフトさせ、「鳥飼」の視座から主体的に心境を描き出す語り手の主体的心境描出の反映である。そこには部分的にはあるが、語り手が、いわゆる登場人物の思考に入り込んでいるのであり、語り手の部分的な介入が対象事態の客体性を弱めている。

一方、④⑤⑨も「鳥飼」の動作であるが、ここでは「鳥飼」は言語化されていない。これは一人称の場合に見た「私」が概念化者として作用するのと同じ構図である。ここでは「私」に変わって、登場人物「鳥飼」が概念化者となって自己の動作を経験者として主観的に解釈している態度を反映している。④「向かい側」、⑨「廊下の見とおせる」という「鳥飼重太郎」の視座を占めなければ成立しない状況の描出が、概念化者としての「鳥飼」の存在を保証している。また、内容から評価を表しているのが明かな⑥⑧も主体的に解釈された事態としての表出であるが、この場合の概念化者は語り手であり、「鳥飼重太郎」の動作を語り手が主観的に評価した事態として表出されている。

このような三人称の登場人物が事態のなかに取り込まれて主体的に解釈する事態の概念化は、自己の動作を表す事態に限らず、概念化者が経験したとする事態であれば如何なる事態も可能である。

【03】①玄関のチャイムが鳴った。高子は靴を履いているところだった。②ゆうべの酔いが、まだ体のなかに残っている。③急がなければならないのに、こんなに朝早く一体誰だろうといぶかりながら、ドアを開けた。④長田が立っていた。⑤思いがけなくて、咄嗟に、畑中の異常を思った。⑥自分のことは忘れていた。⑦が、長田のびっくり箱に驚かされた子どものような声を聞いて、ゆうべの自分の電話を思い出させられた。⑧当惑しながら、時間があまりないけれどもともかくなかに、と長田を促した。 (『寵児』:179)

【03】では、言語化された「高子」を動作主とする下線の事態が、グラウンドから距離をおいた客体としてオンスステージでプロファイルされており、客体的事態として解釈されている。この事態を基軸にして、①から⑧のすべてで「高子」が経験者となって概念化した事態が描出されている。②③⑤⑥⑦⑧は【02】で見た例と同様に、登場人物が概念化者となって自己の動作を主体的に解釈している態度を反映している。これに対して、①④は「高子」の動作ではない。①「玄関のチャイムが鳴った。」④「長田が立っていた。」という事態は、「高子」とは別個の出来事のように見える。しかしながら、これらも他の事

態同様に、「高子」が概念化者となって主体的に解釈している事態なのである。③「一体誰だろうといぶか」る動機となったのは、①の事態を「高子」が認識したからであり、⑤「思いがけな」かったのは④の事態を「高子」が認識したことが動機となっている。つまり、①も④も概念化者としての「高子」の存在を想定しなければ、それぞれに続く②⑤の事態は成立しないのである。姿を顕さない「高子」が結束性の関係を成立させているのである。このように、三人称の語りにおいても、一人称の語りと同様に、登場人物がその姿を顕わにすることなく、事態を主観的に解釈するとう語りの機能は作用するのである。

語りの機能は、次の例に見るように、メンタル・スペースの導入を企図するものであることもある。

【04】三原は双葉商会を出た。どういふふうに河西に礼をのべて立ち上がったかおぼえぬくらいであった。(略) 一つの思考を追いながら、街を彷徨した。

①安田は嘘をついている。②彼は、急行《まりも》で到着したかのようによそおい、その時刻にあわせて、電報で呼びつけた河西と札幌駅の待合室で会ったのだ。

(『点と線』:164)

【04】では「一つの思考を追いながら」という句を「三原」の思考世界へのスペース導入マーカーにして、その思考内容を表示する目的の思考のメンタル・スペースが喚起され、①②がその思考内容として取り込まれている。①では「安田が嘘をつく」という客体事態の实在を、思考世界の今ココから「三原」が主体的に判断している事態であり、続く②では①の判断根拠を「のだ」によって披瀝している。披瀝とは、話し手の内心や体験、個人的な事情といった、聞き手には容易に知り得ない種類のことがらを告白するような気持ちで表明するときしばしば用いられる(田野村:1990)心情であり、ここでは「三原」しか知り得ない因果関係が披瀝されている。このようにメンタル・スペースを導入し、そのスペース内に概念内容を取り込み、また、スペース構成を整えて行くことは、談話の構造構築において本質的であると言ってよい(Fauconnier 1985; Fauconnier and Sweetser 1996)。

現代小説で最も重要な語り手(語り手だとは認められていないのだが)は、三人称の〈意識の中心〉であって、彼を通して作家は自己叙述を濾過する(ブース・W 1991:199)のであり、登場人物たちの内面を描写する語り手たちはその内面への潜入の深さとその座標軸によって違いが生じる(ブース・W 1991:212)。とりわけ、「意識の流れ」とか「内的独白」とか呼ばれる小説には登場人物の思考を取り込むメンタル・スペースの導入は不可欠である。内的独白によってストーリーが進展する次の例を見てみよう。

【05】戸口に立って空を見上げた。

①朝の陽差しし、赤いくまどりで、やっと見分けられる。②遠慮がちな綿毛の雲……とう

てい、雨を望めるような空模様ではない。③吐く息ごとに、体の水分が失われていくようだ。「 」④女は相変わらず、黙ってふるえつづけているばかりだ。⑤おそらく、何も彼も、知り抜いたうえでのことだったのだろう。⑥要するに、被害者面した、共犯者だったのだ。⑦苦しむがいい！……⑧それぐらいの苦しみは、当然のむくいだ。

⑨しかし、その苦しみが、部落の奴等につたわってくれるのではければ、なんの役にも立ちはない。⑩しかも、伝わってくれるという保証は、どこにもないのだ。⑪それどころか、必要とあれば、女を犠牲にしてはばからないことも、じゅうぶんに考えられる。⑫に女がおびえているのも、そのせいかもしれない。 (『砂の女』:137-138)

【05】は「男」を登場人物とした三人称の語り小説の一節である。まず、概念化者である「男」の経験が「戸口に立って空を見上げた」と表される。そして、「空を見上げた」ことが動機付けになって思考のメンタル・スペースが喚起される。この思考メンタル・スペースに続く12個の文が思考内容として取り込まれているのである。12個の文の文末形式は、①①動詞可能形、⑨動詞否定形、③⑤⑫判断の助動詞、②⑦形容詞、④⑧名詞いれ+だ、⑥⑩「のだ」「のである」である。これらの文末形式はすべて言語形式には顕れない概念化者の判断を表すものであり、その概念化者が実際にそれを経験しているとして概念内容を示そうとした表現である。このような構造は、図3を説明する(b) There is a clearing ahead. と同一の構造である。例えば、①では、「戸口に立って空を見上げた」登場人物が「朝の陽差しの、赤いくまどり」の「空」を「見分けられる」と判断しているのである。ここには、登場人物は言語形式としては表出していないが、概念化者としてのその存在を想定しなければ①は成立せず、また、その登場人物は状況を対象化して客体化して捉えているのではなく、自らの意識という場に投影された様相として主体的に捉えているのである。こういった主体的に解釈された事態の連続を取り込んだメンタル・スペースは、深い思いの内的独白の効果を挙げるものであり、この内的告白を通して作家は作品のメッセージを告げることになる。

さらに、全知の語り手の特権について小森(1988:220-221)は次のように述べている。「表現主体が「何でも知っている」ということよりも、作者が作品世界に対して「全知」の位置にある表現主体を選ぶことで、作品内部の必然性や作中人物の相互の関わり、彼らの視野や感受性にしぼられることなく、自己の教養や学識、洗練された感覚や美しい言葉をあやつる能力を、読者に対して自由に示しうる場を得ていたことである。このようにして、作中人物たちの視野から独立した、表現主体と読者によってのみ共有される独自の視野が作品世界の内部に開かれるのである。」

【06】①そのような、やがて雪に埋もれる鉄道信号所に、葉子という娘の弟がこの冬から努めているのだと分かったと、島村は一層彼女に興味を強めた。

②しかし、ここで「娘」と言うのは、島村にはそう見えたからであって、連れの男が彼女のなんであるか、無論島村の知るはずはなかった。(略) ③島村は彼女だけを切り離して、その姿の感じから、自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。④でもそれには、彼がその娘を不思議な見方であまりにみつめ過ぎた結果、彼自らの感傷が多分に加わったことかもしれない。(『雪国』:7)

【06】①では、「島村」でなければわかり得ない自己の感情を、「興味を強めた」として語り手が暴露している。日本語では、「彼は悲しい」というように他者の感情を断定的に表すことはできない。にもかかわらず①が成立するのは、概念化者としての語り手が、語り世界の出来事はすべて語り手の掌中にあり、語り手の責任のもとでの表白であることを知らしめていることに拠る。三人称と呼応する「た」について、野口(1994)は「文末詞「た」は、日本語文法のカテゴリ組織上もっぱら時制詞とし取り扱われてきた。だが実際には、これは人称詞なのである」(ibid:225)と述べ、さらに、「た」と呼応する「三人称の成立は、(略)、言語空間を「事実らしうもてなす」要請に応じている。」(ibid:233)と述べている。

「島村」の感情を説明した語り手は、続く②③④によって、作品内部の必然性や作中人物の相互の関わりを、彼らの視野にしばられることなく、また、彼らが知らないことまでも読者に向かって説明していくのである。つまり、②③④は、作品世界を構成し進展させるというよりは、グラウンドに位置する語り手が同じくグラウンドに位置する読み手を志向した世界を説明する事態といえよう。このような読み手志向の文は、読み手の現実世界の導入を企図したものであることもある。

【07】村里の女たちの長い雪ごもりのあいだの手仕事、この雪国の麻の縮は島村も古着屋であさって夏衣にしていたものだ。(略)

①雪がこいの簾をあけ雪解の春のころ、昔は縮の初市が立ったという。②はるばる縮を買いに来る三都の呉服問屋の定宿さえあったし、娘達が半年の丹精で織り上げたのもこの初市のためだから、遠近の村里の男女が寄り集まって来て、見世物や物売りの店も並び、町の祭のように賑わったという。③縮には織子の名と所を書いた紙札をつけて、その出来栄を一番二番という風に品定めした。④嫁選びにもなった。⑤子供のうちに織り習って、そうして十五六から十四五までの女の若さでなければ、品のいい縮は出来なかった。⑥年を取っては機面のつやが失われた。⑦娘達は指折りの織子の数に入ろうとしてわざを磨いただろうし、旧暦の十月から糸を績み始めて明る年の二月半ばに晒し終わるといふ風に、ほかにすることもない雪ごもりの月日の手仕事だから念を入れ、製品には愛着もこもっただろう。

島村が着る縮のうちにも、明治の初めから江戸の末の娘が織ったものはあるかもしれない。(『雪国』:128)

【07】の①から⑦の連続にも顕れている。「島村」についての描写である冒頭文と最終文のあいだに位置するこれらの文は、作品世界の描出というよりは、むしろ、読み手の現実世界の描出である。『雪国』を解説して伊藤整(1947:170)は次のように述べている。「抽象的だと思われるほど、きびしい感受者としての島村が、自分の周囲に独特の世界を作ってゆくさまは、光を持った人が闇の中を歩くようにも見え、また魔法の杖をもって動物を人間にしたり、子供を天使にしたりする人が歩くのにも似ている。そこに、島村のまわりには作られる世界は、現実の描写が、雪や家屋や風俗や無視などでかこまれていながら、ほとんど抽象に近くなっている。人間の中から、激しい思念や、きびしい呼声や、もっとも細かな真心からの願いなどのみを取り、外の無意味な具体性を棄ててしまう。こういうこの作家の仕方で出来た創作の世界は「真実」であるとの印象を深く与えるけれども、ある大きな距たりを、実人生との間に持っている。(下線筆者)」このような創作世界と実人生のギャップを埋めようと、実人生と創作世界が一つに溶け合っ感じられるよう読み手を誘導する語り手の企図がここには露わである。テキストをなす出来事が言語、内容、目的に関しての参加者の知識体系の範囲外になる場合は、テキスト体系の安定が妨害されるので、その出来事の調整的な統合を通じて一例えば、自らの知識の貯えに追加ないしは修正を加えることによって一回復されなくてはならない(ボウグランド・R 1984:49)。グラウンドで向き合う読み手に知識を共有させ、作品世界を身近なものに感じさせようとする企図が①から⑦の連続では露わである。

3.4 グラウンディング・人称・語り機能

一人称の語りでは二種類の「私」が語り機能を果たす。オンステージでプロファイルされ言語化された「私」と、概念化者としてグラウンドに留まった「私」である。前者は事態を客体化する。しかし、客体化とはいうものの、言語化された「私」も本来的にはグラウンドに位置する「私」と同一であることから、両者のあいだには距離感がなく明瞭に区別することは難しく、その客体性は三人称と比してかなり弱い。これに対し、後者の「私」は事態を主体化する。このような弱客体化された「私」と主体化された「私」との結束によって、「私」が自ら体験し、目撃し、見聞したことが極めて主体的に伝達されることになり、一人称の語り手は「私」の主体性に満ちた世界を創出する。

こうした限定された視座を採る一人称の語り機能に対し、三人称の語り機能は実に多様である。まず、一人称とパラレルなはたらきをするのが、オンステージでプロファイルされ言語化された三人称の登場人物が主体となる事態である。オンステージでプロファイルされるという点では一人称と同じ認知図式を反映するものの、三人称の場合はグラウンドから離れた客体事態であることから、極めて客体的に解釈された事態である。そして、そ

の登場人物を概念化者として概念化された事態は、その登場人物にとっての主体的な事態となる。しかしながら、登場人物にとって主体的な事態も、グラウンドから離れた事態であることから、グラウンドに位置する読み手にとっては、登場人物が言語化された事態と比して、その客体性は弱められはするものの、未だ客体性を帯びた事態として解釈される。

このようにして、三人称の語りはグラウンドから離れた客体世界を創出する。三人称の語り形態の最大の目的は、世界の虚構性の構築に奏功するグラウンドとの乖離の企図であるといえる。そこに、その虚構世界に読み手を誘引するための限りなく多くの方法が加えられる。舞台装置、行動の意味の説明、思考の経緯や劇的に表現するまでもないような取るに足りない出来事の要約、登場人物がしたのでは不自然に思えるような物理的出来事や詳細の描写、これらすべてのことが様々な形態をとる（ブース・W 1991:220）。実に様々な手練手管ではあり無限定・無制約であるものの、これらはすべてグラウンドに在る読み手を志向したものである。

4 終わりに

本稿では、認知言語学の談話構造構築の観点から人称の意味機能を考察し、物語論における人称による語り機能を明らかにした。従来の物語論では、一人称の語りは語り世界の内側にいる語り手によって展開され、三人称の語りは語り世界の外側にいる語り手によって展開されるといわれている。しかしながら、何故一人称では内側であり、三人称では外側となるのかという根拠は説明されていない。本稿では、両者の差異を話し手の立脚するグラウンドとの関わりから考察し、事態解釈の観点から説明した。物語論において語りの機能は、物語論の要であり、人称のみならず、実に様々な要因が関与し作用している。今後は、視点、焦点化、パースペクティブなど、事態解釈を説明する多様な認知的観点からさらなる考察をすすめたいと考える。

【出典作品】

- 安部公房. 1981. 『砂の女』新潮社
- 川端康成. 1947. 『雪国』新潮社
- 津島佑子. 2000. 『寵児』講談社文芸文庫
- 松本清張. 1971. 『点と線』新潮社
- 渡辺淳一. 1981. 『神々の夕映え』講談社文庫

【参考文献】

- 池上嘉彦, 2000. 『「日本語論」への招待』講談社
- 小森陽一, 1988. 『構造としての語り』新曜社
- 榎敦子, 1996. 『行為としての小説：ナラトロジーを超えて』新曜社
- 坂部恵, 1990. 『かたり』弘文堂
- シュタンツェル・F. (前田彰一訳), 1989. 『物語の構造』岩波書店
- ジュネット・ジェラルド (花輪光一・和泉涼一訳), 1985 (a). 『物語のディスクール』水声社
 _____, 1985 (b). 『物語の詩学』
 _____ (花輪光一・尾河直哉訳), 2004. 『フィクションとデフィクション』水声社
- 田野村忠温, 2002. 『「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 中村雄二郎, 2000. 『共通感覚論』岩波書店
- 野家啓一, 1996. 『物語の哲学』新曜社
- 野口武彦, 1994. 『三人称の発見まで』筑摩書房
- ハンブルガー・K (植和田光晴訳), 1986. 『文学の論理』松籟社
- バンヴェニスト・E. (岸本通夫監訳), 1983. 『一般言語学の諸問題』みすず書房
- 廣野由美子, 2011. 『一人称小説とは何か』ミネルヴァ書房
- ブース・W. (米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳), 1991. 『フィクションの修辞学』水声社
- ボウグランド・R / ドレスラー・W. (池上嘉彦他訳), 1984. 『テキスト言語学入門』紀伊國屋書店
- 前田彰一, 1996. 『物語の方法論：言葉と語りの意味論的考察』多賀出版
 _____, 2004. 『物語のナラトロジー』彩流社
- 安岡章太郎, 1949. 『和解』新潮社
- 山梨正明, 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版
 _____, 2001. 「ことばの科学の認知言語学的シナリオ」『認知言語学論考』ひつじ書房
 _____, 2004. 『ことばの認知空間』開拓社
 _____, 2009(a). 『認知構文論：文法のゲシュタルト性』大修館書店
 _____, 2009(b). 「認知語用論からみた文法・論理・レトリック」『語用論研究 11号』語用論学会
- 吉田章宏, 2010. 『心に沁みる心理学：第一人称科学へのいざない』川島書店
- Chatman, Seymour. 1978. *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*. Ithaca: Cornell University Press
- Langacker, R. W. . 2001. *Discourse in Cognitive Grammar*. Cognitive Linguistics 12: 143-188
 _____, 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Lanser, Susan Sniader. 1981. *The Narrative Act: Point of View in Fiction*. Princeton: Princeton University Press
- Prince, Gerald. 1973. *A Grammar of Stories*. The Hague: Mouton
- Talmy, Leonard. 1996. Fictive Motion in Language and 'Conception', In *Language and Space*, 211-276. Cambridge, Mass.